## ―信長・第57回夏季県外史跡踏査　岐阜県・愛知県濃尾平野方面（関ケ原町・岐阜市・関市・犬山市・多治見市・土岐市）家康による天下統一への道程と濃尾平野の伝統産業を探る― 踏査報告

川崎市立川崎総合科学高校　　阿部　功嗣

### はじめに

平成 30 年度(2018)夏季県外史跡踏査は下記のコースと講師陣で行った。現地でしか学ぶことができない歴史を各講師からご教授いただき大変意義深い踏査となった。本稿では飯沼氏を講師にお迎えした関ヶ原の踏査に絞り報告したい。他については社会科部会報第 84 号を参照いただきたい。

第１日目(8/23)：小田原－関ヶ原古戦場跡（陣場野・関ヶ原町歴史民俗資料館・笹尾山石田三成陣地）－不破関跡（旧中山道・不破関資料館）－関（関鍛冶伝承館・春日神社・刃物会館）宿泊地：長良川温泉　長良川観光ホテル石金

第２日目(8/24)：岐阜城（岐阜城資料館・織田信長居館跡他）－（円徳寺・楽市楽座伝承地・岐阜飛行場（旧陸軍各務原飛行場）－犬山城（国宝犬山城・犬山城城下町・有楽苑）－多治見（虎渓山永保寺）－土岐（織部の里公園・元屋敷窯跡・美濃陶磁歴史館）－横浜

講師：飯沼暢康氏（関ヶ原歴史民俗資料館・不破関資料館館長）・江西奈央美氏（関鍛冶伝承館学芸員）・恩田裕之氏（岐阜市教育文化振興事業団埋蔵文化財事務所）・澤井計宏氏（土岐市美濃陶磁歴史館学芸員）

### １．関ヶ原の地理的歴史的環境

台風 20 号の影響で時折風雨が強まる中、第１日目の昼過ぎにバスは名神高速道関ヶ原インター経由で関ヶ原へと到着した。北は伊吹山地、南は養老山地・鈴鹿山脈が塞ぐため、ここ関ケ原が畿内から濃尾平野へと直結する唯一の出入り口といえる。旧中山道、国道 21 号線、東海道本線、名神高速道路、東海道新幹線といった東西を結ぶ交通の大動脈がこの一地点に集中している。また、南に目を向ければ養老山地と鈴鹿山脈の間へと伊勢街道、北に目を向ければ北陸へと続く北国街道と、まさに文化の十字路ともなっている。また、丸餅と切り餅やかつおだしと昆布だしなどの食文化や、西日本方言と東日本方言の大区分など、様々な文化的特徴についても関ヶ原にその境界線を引くことができる。

関ヶ原歴史民俗資料館で講師の飯沼先生と合流し、周囲の地形について説明を受けた。濃尾平野垂井宿方面に開ける東側は、家康が開戦前に着陣した桃配山の麓辺りが海抜 90m 程である。三成が西軍の指揮を執った笹尾山や、宇喜多・小西・島津・大谷勢らが強固な陣城を築いた天満山が西縁となり、その麓辺りは海抜 140m 程である。西から東へとなだらかに下る地形は、西軍にとって攻守共に有利な絶好の合戦場であったことが明白である。

陣場野公園へ移動し、家康が合戦で最後に陣を構え首実検を行ったとされる床几場を見学した。天保 12 年(1831)12 月に老中水野忠邦が、天保改革の中で「士風振興」を目的として領主竹中家に命じ、御床几跡と伝わる地に松を植え、東照大権現碑を立て土塁で囲わせ顕彰した。中山道を参勤交代で通う西国諸大名は、この御床几跡へわざわざ道をそれて立ち寄ることを余儀なくされた。古老の口伝は、「昔はこの土塁を権現様と称し、神のごとく敬っていた」が、明治初期に討幕勢力により引き倒され、「大権現の碑は草の中に寝ていた」と伝える。明治 39 年(1906)に関ヶ原村が関ケ原合戦 300 年祭を実施するにあたり、廃墟と化していた御床几跡を復活させた。その時に明治政府にはばかり、徳川家の聖地としての意味合いを消して関ケ原合戦の史跡であることを強調し、新しく設置した碑銘を「床几場徳川家康新旗験首處」としたため現在は単に「床几場」

と呼ばれている。

**2．関ケ原歴史民俗資料館から笹尾山石田三成陣地跡へ**

資料館に入り、合戦当日までの両軍の動きをジオラマ展示で解説していただいた。大垣城を本陣としていた西軍は、慶長5年(1600)9月14日深夜に豪雨の中、牧田街道を西進し関ヶ原へと移動した。その動きを察知した東軍は、翌15日早朝に家康が到着していた赤坂岡山の本陣から中山道を関ヶ原へと進軍し、桃配山に本陣を置いた。この時点で、小早川勢の松尾山を中心に、北の石田勢から東の南宮山の毛利勢へと鶴翼の陣で東軍を包み込む西軍にとっては、まさに万全の体制となった。

資料館を出てバスに乗り、東軍と同じ動きで笹尾山へ向かう。西軍は開戦前より防護柵や土塁を築き、押し寄せる東軍を鉄砲で狙い撃ちしては押し返すので、午前8時の開戦から1時間後までは西軍が明らかに有利であった。しかし、実際に戦闘に加わっていたのがほぼ宇喜多・小西・石田勢のみと、東軍に対して半分に過ぎなかったため2時間後には押されはじめ、正午頃の小早川勢の裏切りにより西軍は総崩れとなった。笹尾山麓の陣跡には明治期に建てられた決戦地碑が建立されている。

笹尾山に登り、南宮山、伊勢街道、松尾山、開戦地となった天満山麓まで関ヶ原の全てを見渡しながら飯沼先生から解説を受けた。そして、南宮山の反対側にいて視界にすら入らない毛利勢や、秀頼の着陣を熱望しつつも小早川勢に占拠された松尾山を見つめ指揮を執っている三成の心中如何ばかりであったか、また天下の趨勢が決定付けられていく様子が思い描けた。

NHK大河ドラマ「西郷どん」に描かれた「妙円寺詣り」は、東軍の正面を突破し、伊勢街道から帰鹿を果たした島津義弘の故事を偲んで合戦前夜の旧暦9月14日に418年間行われ続けている。旧関ケ原第一小学校の広場では、毎年桜の時期に模擬関ケ原合戦が行われるが、一昨年山本耕史さんが来た時には8万人という関ケ原合戦以来の人出があった。火縄銃の実演をすると、たった一丁の銃声でも周囲の山に反響して大騒音となった。当時は両軍1万丁の火縄銃が一斉に火を吹いたので、互いの声は全く聞こえなかったと考えられる。笹尾山を下り再びバスに乗って不破関へ向かう。中山道沿いの西首塚は、合戦後に地元の人々が東西両軍区別なく葬り、観音様を祭って毎年お盆過ぎに供養祭を行っている。華々しい歴史の舞台という外からのイメージとは全く異なる地元の思いがここにある。

**3．壬申の乱と不破関の設置**

関ヶ原の地名の由来は、『続日本紀』和銅元年(708)に記された「三関」の一つ不破関にあり、全容が発掘調査で明らかになっているのは中でもここだけである。藤古川左岸の段丘上に西の畿内側をコの字型に塞ぐ形で建設され、畿内防備が目的であれば藤古川の右岸に位置するはずなので、設置の目的は畿内で起きた事件を東国へと波及させないことだと考えられる。幅5mの土塁が北辺・東辺に各400m、南辺に100m位で築かれ、段丘涯側が開口している。中を旧東山道が貫き、108m四方の板塀に囲われた官庁を中心に、兵舎、馬屋などが配され、土塁の三隅には望楼が備えられた。出土品は平城宮のものと同型式の軒瓦や須恵器・土師器などである。

奈良時代末に関としての機能は廃止され、平安時代に廃止後二、三百年経過したうらびれた関の様子を見ようと都から貴族が来て和歌に詠んだことから、「不破」＝「うらびれた」という意味の歌枕である。公家の下向のうわさを聞き付けた当地の役人が不破の建物を改修していたら、それでは行く意味がないと公家が車返しをしたという逸話もある。

不破関資料館で解説を受けたのち、天武天皇ゆかりの兜掛石、沓脱石などを見学した。吉野か

ら当地にかけて壬申の乱のゆかりの地には、点々と沓脱石が存在する。それらをつないで地元の人々は「天武道」と呼んでいる。垂木町のある旧家は天武天皇から授かった勝栗を家紋とし、敷地内に兜掛石があり毎年天武祭を行っている。飯沼先生曰く「こういった謂れとか伝承は、完全な史実とは言えなくても大事な何かを伝えている。いわゆる「日本史の舞台」の本当の歴史的価値や文化的意味は、その土地に住む人々の間に残された伝承や慣習の中から見出されるべきものではないか。」と。高校生へ歴史から学ばせる立場として持つべき視点を今回の踏査でまた一つ得ることが出来た。感謝である。

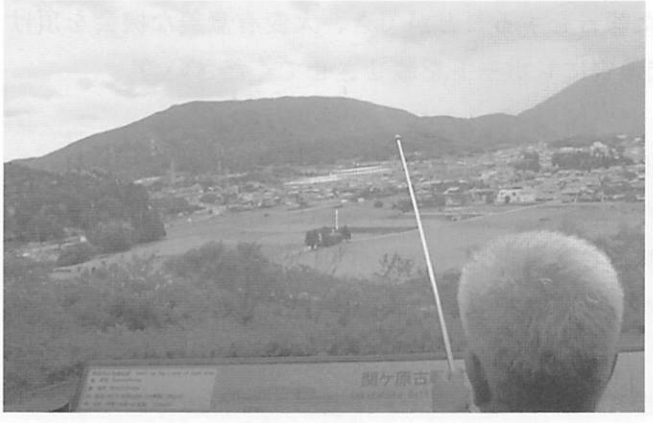
**《参考文献》**

三池純正 2016『改訂新版 敗者から見た関ケ原合戦』洋泉社

『美濃不破関』 1978 岐阜県教育委員会　　『関ケ原町史通史編上巻』 1990 関ケ原町

1．床几場　陣場野公園内

2．関ケ原歴史民俗資料館



3．笹尾山より南宮山・桃配山方面を望む

4．笹尾山より天満山・開戦地・松尾山を望む

5．不破関ジオラマ展示　不破関資料館内

6．不破関資料館